

「もの」には物語があります。大切にしてきた人々の思いがあります。このコーナーでは、長崎大学のキャンパスに眠るお宝や芸術作品をクローズアップ。その背景を知り、好奇心をくすぐられたら、今度は本物を観に大学に足を運んでみませんか？

温故知新

Find new
wisdoms through
old things.

Volume
6

「中部講堂」を「なかべ」とすんなり読めるのが長大生や長大OB。一般の方は最初「ちゅうぶこうどう？長大のキャンパスの真ん中にある講堂ってこと。」

—— 中部講堂は、大洋漁業（現在のマルハニチロ水産）元社長である中部謙吉氏の寄付によって建てられたことから、その名が冠されました。一九六二（昭和三七）年に建設され、完成の式典にはご本人も参列されたそう。文教キャンパスの正門を入ってすぐ左に堂々とした姿を見せま

す。夕暮れどき、エントランスに灯りがともると、今日はどんなイベントがあるの？と期待感でわくわく。今号の特集にも関連したリレー講座をはじめ、大学関連の数々の講演会場として、また全学教育の講義室としても使われています。長崎大学施設整備課長の山中泰さんにお話を伺いました。

「この講堂が建てられた当時、周囲の校舎は木造ばかりで、この建物だけが鉄筋コンクリート。とっても目立っていたそうですよ。学校建築は画一的な設計が多かったのですが、個人の寄付で建てられたため自由に設計できたらしく、意匠にもかなりこだわって個性的なものになったようです」

横に長い窓を持つモダンイズム建築は、建築家、ル・コルビュジェを旗頭に一九五〇年代以降、世界中で大流行しました。この建築にもそのエッセンスが散りばめられています。柱と梁のパランスの妙、正面右側のシンダーは外部階段でアクセントにもなっています。外壁は打ちっぴなしのコンクリートを使用。二階に並ぶ四つの扉は一枚一枚色違い（建った当初は赤や黄色などの原色でした！）、扉そばのサッシの縦のラインもあえて不規則でモダンです。脇に回り込むと、五

メートルほどの斜めの構造物が何本も建物に伸びているのが目に入ります。これは控え柱と呼ばれ、中の大きな空間を両脇からがっしりと支えているのです。「建てたのは長崎の建設会社です。著名な建築家の設計ではないのですが、長崎大学の中で一番好きな建物ですね」と山中さんは語ってくれました。

長崎大学では、内装や照明などの設備を年々改善しながら、大切に使い続けています。また、水産学部校舎のそばにある捕鯨砲も、大洋漁業からのいただきもの。

ちなみに、中部氏は長崎大学のほかにも全国で四つの学校に寄付をして「中部講堂」を造るなど、教育に力を注いできた経済人です。絵や短歌が趣味で、号は「流石」。石は流れて丸くなる、が由来ですが「しかしこれは、サスガ」とも読みます、もともと名前が勝ちすぎていますが「とご本人は自叙伝に記していますね。茶目っ気のある方だったんですね。初めて会う人でも笑わせられっぱなしというくらい豪快で楽しい人でした」とは、ご親戚でもある長崎倉庫社長の中部憲一郎さん。

中部講堂（文教キャンパス内）

座席数714席（車いす対応2席）。
大学内の行事に優先的に使用されるが、空いていれば一般利用も可能。1カ月前までに事前予約が必要。使用料1時間6,200円～（機器使用料込み、空調別）

問い合わせ先
財務部 財務企画課
財務戦略室 決算班（資産管理）
TEL.095-819-2151

<http://www.nagasaki-u.ac.jp>

文教キャンパスのランドマークは、
1960年代の近代建築。
大学が発信する情報や文化の多くは、
ここからあふれ出てきます。

中部講堂